

○江戸園芸家、伊藤伊兵衛について(石井勇義氏講演用掛図に関連して)(木村陽二郎) Yojiro KIMURA: On the horticulturist Ihei Ito's family, in the tables of late Yûgi Ishii.

ツバキの品種の研究<sup>1)2)</sup>から、伊藤伊兵衛に関心の深い津山尚博士は、故石井勇義氏が講演の際に用いた掛図三枚を遺族から託された。この貴重な掛図の内容を記録することを津山博士から筆者は頼まれた。大正から昭和にかけて園芸著述家として大いに活躍された石井勇義氏(1892. 9. 20—1953. 7. 29)のこの掛図は貴重なものと思われる。伊藤伊兵衛によって日本の園芸は盛んになり、その著述によって記録が残った。伊藤家は江戸期日本園芸学史にとって貴重な存在であるばかりでなく、日本植物学史にとっても重要である。ここに石井氏の掛図三枚を紹介し、ついで私見を述べたい。

春にはツツジ、サツキに色どられて美しく、さすが染井の里と思わせる駒込駅で国電を降りて、大通りをよこぎり、国電線路にそった道をゆくとすぐ染井橋に出る。ここで右にまがって一直線に歩いていくと、五分たらずで駒込三丁目と六丁目が接するところに出る。そこにはコンクリート塀に大師道と大きく彫った碑がはめこまれて残っているが、これを右に折れてすこしいくと、右手の駒込小学校に面した左手に西福寺がある。その境内墓地に伊藤家の五基の墓が並び、中央が樹仙浄観の墓である。後方の立派な金属板の説明に次のように書かれている。

都史蹟 伊藤政武墓 所在 豊島区駒込六丁目一番四号 西福寺内

指定 昭和三十五年二月十三日

徳川時代の著名な園芸家、八代將軍吉宗の時、江戸城内の植木を管理していた。日本種の深山楓に舶来の楓を接木することに成功している。なお、かれは絵画をよくするとともに、草木に関する著書も多く、地錦抄、草花絵百図などを著わし、現存する著作には次のものがある。

増補花壇大全	八冊	一六九四年刊	広益地錦抄	八冊	一七一九年刊
草花絵全集	三冊	一六九九年刊	地錦抄附録	四冊	一七三三年刊
増補地錦抄	八冊	一七一〇年刊	百色紅葉集	一冊	一七三七年刊

昭和四十四年十月一日建設 東京都教育委員会

雑誌『盆栽』の主宰者小林憲雄氏は「平尾彦太郎、室田老樹斎、松崎直枝とともに伊兵衛の墓を探索して、染井の古刹西福寺の境内に、住職の助力を得て、倒伏し無縁と化していた伊兵衛の墓石を発見し、後にこれを修復し供養した<sup>1)</sup>」。都の史蹟にいう伊藤政武は、石井氏の次表の四代目伊藤伊兵衛、政武である。

墓石には 宝暦七丑年 / 樹仙浄観信士 / 十月二日 と彫ってあり側面に 昭和十八年十月二日 / 地錦抄ノ著者 / 為伊藤伊兵衛翁菩提 / 祠堂金一百円納 とあり、その下方に後進 とあって、清水香雪、平尾彦太郎、小林憲雄と彫られている。

## I. 石井勇義氏の講演用掛図

代々伊藤伊兵衛を名乗り 10 代ほど続いたが、今では子孫が絶えた。寺の過去帳には政武というような俗名は一切なく、生年月日もわからず、戒名と命日の他は、伊藤伊兵衛父とか伊藤伊兵衛 7 とかしか書いてないので、何代目か、なんという幼名とか、その著書は何かなど過去帳からは一切わからない。石井氏が一枚の系図表を作るのにずいぶん苦勞されたという遺族の話を津山博士にきいたが、もっともなことと思う。次にあげる三枚の掛図のうち最も価値あるものは、第一表の伊藤家系図であろう。このような研究はこれまでなかったからである。

## (1) 伊藤伊兵衛の系図

石井氏の掛図では代を線で結んである。そしてその著書名は横に棒を引いて出している。また三之丞内を記す行は、初代と二代目とをつなぐ線の中に記してある。ここでは紙面を節約した形式で示す。

表 1 (石井勇義氏による)

初代伊兵衛	万治元年 3 月 28 日 (1658) 歿	染井伊藤伊兵衛父、淨蓮禪門
———	三之丞内	元禄 4 年 12 月 18 日 (1691) 妙雲信女
二代目伊兵衛	享保 4 年 10 月 9 日 (1719) 歿	染井伊兵衛父、樹栄定輪信士
三代目伊兵衛	元文 4 年 7 月 19 日 (1739) 歿	伊藤伊兵衛父、覚栄道実信士
錦繡枕	元禄 5 年	1692
花壇地錦抄	元禄 7, 8 年	1694 三之丞
四代目伊兵衛	政武 宝暦 7 年 10 月 2 日 (1757) 歿	染井伊兵衛、樹仙淨観信士
草花絵前集	元禄 12 年	1699 地錦抄附録 享保 18 年 1733
増補地錦抄	宝永 7 年	1710 百色紅葉集 元文 2 年 1737
広益地錦抄	享保 4 年	1719 百花椿名よせ色附 (一枚刷)
草花名寄略書	享保 7 年	1722
五代目伊兵衛	享和元年 1 月 2 日 (1801) 歿	染井伊兵衛、春山證覚信士
六代目伊兵衛	嘉永元年 3 月 25 日 (1848) 歿	染井伊兵衛、等空清信士
「草木奇品家雅見」拝領かえでの項に六代目伊兵衛の名見ゆ。		以上
〔木村註〕『花壇地錦抄』の出版は一般に元禄 8 年とする。序文は 7 年である。		

## (2) 伊藤伊兵衛の著作と内容

表 2 (石井勇義氏による)

I. 錦繡枕 著者きりしま屋伊兵衛 元禄 5 年 (1692), 元禄 8 年前 長生花林抄と改題, 享保 18 年再版。半紙四切。五冊 (つつじの部 3 冊 さつきの部 2 冊総頁数 317)。登載品種 つつじ類 154 さつき品種 161。

II. 花壇地錦抄 著者 武陽染井野人の三之丞集。元禄 7-8。登載品種 ぼたん 477

しゃくやく 116 つばき 206 さざんか 50 つつじ 169 さつき 162 うめ 48 もも 21 なし 10 かいどう 3 かんきつ類 10 くり 7 さくら 46 かえで 23 さんしょう 25 ささ 77 其他花木類 83 (品種を含む) 草花春之部 53 夏之部 221 秋之部 64 きく 230 其他 10 冬草之部 5, 美濃四切, 6冊 (4・5合冊) 総頁 281。

Ⅲ. 草花絵前集 (草花絵全書) 元禄 12 年 (1699)。美濃判本。耕人伊兵衛図 3 冊。110 頁 (合本あり)。自生花卉 70, 渡来花卉 30。

Ⅳ. 増補地錦抄 東武江北染井伊兵衛。宝永 7 年 (1710)。美濃四切版 8 冊。総頁数 441。樹木類 ぼたん 488(11) しゃくやく 163(47) つばき 220(14) つつじ 170(1) さつき 169(5) うめ 53(5) もも 24(2) かいどう 4(1) なし 10 かんきつ類 10 くり 7 あめんどう 2 かいで 59(36) 雑類 40(30)。草花類 なでしこ 28(17) 花菖蒲 40(23) きく 321(91) 其他草花類 421(58)。

Ⅴ. 広益地錦抄 東武江北染井伊藤伊兵衛。享保 4 年 (1719)。美濃四切版。総頁数 425。樹木類 つばき 12 さざんか 20 かへで 36 草花類 38 薬草 191 花木 39。

Ⅵ. 地錦抄附録 東武江北染井伊藤伊兵衛。享保 18 年 (1733)。美濃四切版。総頁数 236。草花類 92 花木類 11 かへで 28。3 巻に奥付あり政武と記入。

〔木村註〕Ⅳの「増補地錦抄」で、( ) は増補された品種の数を示している。ここで石井氏の表には東武江北とあるのを、原書を見て東武江北と訂正した。また氏の表ではつばき 220(17) さつき 169(7) とあるのを、原書を見てつばき 220(14) つつじ 170(1) さつき 169(5) と訂正した。

### (3) 草花絵前集にのせる植物

この表のみ石井氏の表題がついていた。100 余の植物から 30 ばかり抜いたのは、当時の名と今よぶ名が著しく相違するものなのであろう。

表 3 草花絵前集登載植物異名整理表抄 (石井)

出 展 名	和 名	
おきなそう 翁 草	ヤブラン	<i>Liriope graminifolia</i> Baker var. <i>bicolor</i> Makino
菫草	ツボスミレ	<i>Viola grypoceras</i> A. Gray
なつていか 節庭花	ゼンテイカ, ニッコウキスゲ	<i>Hemerocallis nipponicola</i> Makino
白はゝこ花	シロバナタンポポ	<i>Taraxacum albidum</i> Dahlst.
ほてい草	クマガイソウ	<i>Cypripedium japonicum</i> Thunb.
こあむひ 小葵	ゼニアオイ	<i>Malva sylvestris</i> L. var. <i>mauritiana</i> Maxim.
なんきんえびね	キエビネ	<i>Calanthe striata</i> R. Br. var. <i>Sieboldi</i> Maxim.
ばれん 馬蘭	ネジアヤメ	<i>Iris Pallasii</i> Fisch.

くろふし 黒節	フシグロセンノウ	var. <i>chinensis</i> Fisch.
らん 蘭	スルガラソ	<i>Lychnis Miqueliana</i> Rohrb.
とうれん 唐蓮	チャワンバス	<i>Cymbidium ensifolium</i> Sw.
れんげ 小蓮花	ヒツジグサ	<i>Nelumbo nucifera</i> Gaertn. forma <i>Nymphaea tetragona</i> Georgi var. <i>orientalis</i> Casp.
おかかうほね 岡河骨	エンコウソウ	<i>Caltha sibirica</i> Makino var. <i>decumbens</i> Makino
あめが下ゆり	ベニスカシユリ	<i>Lilium elegans</i> Thunb. var. <i>Horsmanii</i>
めうがそう 茗荷草	ヤブミョウガ	<i>Pollia japonica</i> Thunb.
ぎん 銀ふうげ	ニリンソウ	<i>Anemone flaccida</i> Fr. Schm.
げんじそう 源氏草	ペンケイソウ	<i>Sedum alboroseum</i> Baker
天南星	ウラシマソウ	<i>Arisaema Thunbergii</i> Blume var. <i>Urashima</i> Makino
もつかう	オオグルマ	<i>Inula Helenium</i> L.
きくらし 桜節	マツモトセンノウ	<i>Lychnis Sieboldii</i> V. Hout.
白天南星	マムシグサ	<i>Arisaema serratum</i> Schott. forma <i>Thunbergii</i> R. Knuth
ゆわう草	クサレダマ	<i>Lysimachia vulgaris</i> L. var. <i>davurica</i> R. Knuth
すじゆり 筋百合草	ヤマユリの紅筋	<i>Lilium auratum</i> Lindl. var. <i>rubrovittatum</i> Makino
われもかう	メガルガヤ	<i>Themeda triandra</i> Forsk. var. <i>japonica</i> Makino
かるかや 刈萱	アブラススキ	<i>Spondiopogon cotulifer</i> Hack.
なつゆき 夏雪	キャウガノコの変種	<i>Filipendula purpurea</i> Maxim. forma
すずらん 鈴蘭	カキラン	<i>Epipactis longifolia</i> Blume
あわば 淡穂	サラシナシヨウマ	<i>Cimicifuga simplex</i> Wormsk. var. <i>ramosa</i> Maxim.
きじのお	ヒメトラノオ	<i>Veronica spuria</i> L.
たかたう	アキカラマツ	<i>Thalictrum Thunbergii</i> DC.

〔木村註〕石井氏の表は原書の名、すなわち 出展名に 仮名がふってないが、原書にふってあるものはつけておいた。

## II. 伊藤伊兵衛と著書についての考察

石井勇義氏は上記三枚の掛図を以て、昭和 17・8 年頃、園芸学会で講演されたということだが、筆者は石井氏にお会いしたこともなく、この学会の講演にも出席していないので、掛図以外の石井氏の意見に全く無知である（追記参照）。

チュンベリー（ツンベルグ）に中川淳庵が贈呈したのが、地錦抄（増補、広益、附録）二十冊であることを明らかにして以来<sup>3)</sup>、筆者は特に伊藤伊兵衛に興味をもち、昨年出版した『日本自然誌の成立』にも言及していたので<sup>4)</sup>、今回の石井氏研究の掛図紹介を引受けたのであるが、これによってさらに筆者自身研究を深める機会を与えられたのである。

文献からの考察のみでは物足らず、筆者自身西福寺へ行って、住職の花園昌成師におあいした。残念なことに、先代の花園有運師<sup>ゆううん</sup>は、昭和 48 年 4 月 26 日に亡くなられたとのことである。有運師は群馬前橋の無量寿寺の長男として生れ、東京の大学を出て西ヶ原の無量寺の住職のもとで修行した。当時西福寺はさびれて住職がおらず、無量寺（北区西ヶ原 1 丁目 34）からときどき読経に来る程度だった。有運師が大正 13 年に住職としてここに来たときは、庵には火鉢と座ぶとんの 5~6 枚ぐらいいしかなかったという。

有運師は戦後、伊藤伊兵衛の墓所とわかり、自分の姓も花園というので、これも縁と、晩年はずいぶん伊兵衛に力を入れておられたという。過去帳を拝見したが、一時すたれた寺なので、過去帳も他から写したもので古いものはなかった。

筆者はこの西福寺よりすこし北方にある古河庭園の横の無量寺に行き、住職の金子良運師にお会いし、過去帳を見せていただいた。石井氏の記された妙雲信女から等空清信士までの命日戒名はすべてあった。多くのことを学んだにかかわらず、石井氏の表をほとんど出ることもしなかったが、また私の考えを変える材料もなかった。

石井氏の学会発表以前の伊藤伊兵衛研究に、矢野宗幹博士の発表<sup>5)6)</sup>があり、それは東京府北豊島郡誌や小林憲雄<sup>7)8)</sup>氏の研究に尽され、ただ珍らしい『武江染井翻紅軒霧島の図』を紹介するのみと謙遜されている。矢野博士は「有名な伊藤伊兵衛は一人であったか、この点は確かでない。しかし地錦抄其他の著書を書いたのは或は一人であったらふ。其伊兵衛が幼名三之丞であり、政武と言ひ、樹久と号し、又翻紅軒と言ったかと思う。小林さんの発見せられた樹仙浄観信士という墓がこの人のであるか否か、恐らくさうであらふと思ふが、確とは言はれない。」と疑を残す。

石井氏の学会発表以後の前島康彦氏の研究<sup>9)</sup>には『錦繡枕』と『花壇地錦抄』の著者を三代目三之丞<sup>さんのかんじょう</sup>とし「三代目が三之丞と言っているのは何か格別の理由があったと考えられる」とし、「伊兵衛政武は三代目伊兵衛の子である」とし、政武を四代目とすることは石井氏に同じである。筆者はこの段になって矢野、前島両氏の論文を知ったが、

香山益彦『花壇地錦抄』の解説<sup>40)</sup>は読んでいて、その書物の内容から『花壇地錦抄』を父の伊兵衛、一連の『地錦抄』もの(増補, 広益, 附録)を子のものと考えた<sup>4)</sup>。しかし現在石井氏の表を検討した結果から、次のことを提唱したい。

一、初代と二代目の間にもう一代入れて、その後の代を一代づつずらす。

二、錦繡枕(1692)花壇地錦抄(1694)の作者は三代目樹栄定輪、三之丞である。

三、増補地錦抄(1710)、広益地錦抄(1719)、地錦抄附録(1733)、四季草花名集(1722)、歌仙百色紅葉集(1737)の作者は五代目樹仙浄観、政武である。

四、草花絵前集は戒名もわからぬ二代目伊兵衛の描いた図を、三代目三之丞が出版したものである。

五、さらに確実な事実がみつかるまで、伊藤伊兵衛の系譜を次のように考える。

代目	戒名	歿年	通称	代目	戒名	歿年
1	浄蓮禪門	1658		6	春山證覚	1801
2	不明	不明		7	後繁寿栄	1853
3	樹栄定輪	1719	三之丞	8	寂願清入	1855
4	覚栄道実	1739		9	芳安全明	不明
5	樹仙浄観	1757	政武	10	梅全智法	1877

次にこのような結論に達したことを説明したい。

#### (1) 初代伊兵衛、浄蓮禪門

初代伊兵衛については寺の過去帳に名をみず、墓も知らない。「先祖伊藤伊兵衛此所に住シ、万治元年三月廿八日死ス」(風土記稿よりの引用<sup>9)</sup>)。この所とは現在は浄土宗専修院(豊島区駒込六丁目八八番地)の寺地となっている。裏は土地が低くなり眺めのよい所である。ここに来るには染井橋からの通りを右に折れて、西福寺の方へ行ってしまうのでそのままさらに進み、左にスイミングセンター、それに対する右に天理教東京教務支庁のところで右に折れる。この折れる所に二段に六地藏尊の並んだ、つまり十二地藏尊を刻んだ大きな石碑がある。磨滅のため字が全然よめないのは残念だが、初代伊兵衛が建てたか、あるいはそれ以前からあったものだろう。そこをまがって行くとすぐ専修院だが、門の入口の右手に立派な宝塔が建っている。前島氏<sup>9)</sup>も記しておられたように、武州豊島郡染井村/施主敬白/為妙薰禅定尼菩提/寛永第十八巳年八月十九日と刻されている。寛永18年(1641)建立なのと戒名も似ているので、初代伊兵衛が妻の菩提をとむらうために、自分の敷地内に建立したものと推測する。

前島氏<sup>9)</sup>はまた西福寺通用門脇の六地藏尊を刻した、巨大な石碑を紹介されている。この六地藏尊は現在、通用門内の横に他の石仏と共にコンクリートでいっしょにかためられているが、もとは門外にあった。しかしいたずらする人がいるので、現在のよう

に保護されているとのことであった。

西福寺の六地藏尊は一つの大きな石に六地藏尊が浮き出して彫られて、上に奉造立

六地藏尊容為二世安樂也と中央に彫られ、向って右に武州豊島之郡染井村施主、左に明暦元年乙未十一月八日 / 敬白 ときざみ、地藏尊の下に名が一行に刻されているが、最初の円善善西は住職の名であろう。ただし西福寺の住職ではないようである。つぎに伊藤猪兵衛を先頭に、同久兵衛、同吉兵衛、同八左衛門、同庄右衛門、同久兵衛、同市兵衛とつづき、最後に伊藤姓でない二名の名が刻んである。

前島氏は「一族の名を連ねているのをみれば、伊藤家は明暦初年(1655)すでに数家に分れていた事を知り、しかも猪兵衛の家がその筆頭に挙げられているので、その格式が高かった事を想像するに十分である。古くは伊兵衛といわずに猪兵衛と称していたことがわかる」と記しておられる。これを建てたのは伊藤家の筆頭に名を記す猪兵衛その人であり、初代伊兵衛と思う。またそれに名をつらねるのは子供達だろう。

## (2) 二代目伊兵衛と三代目伊兵衛 樹栄定輪信士

筆者は石井氏の表にない二代目伊兵衛が存在していたと思うが、その戒名は過去帳になくわからない。しかし樹栄定輪が亡くなった享保4年(1719)と、初代の亡くなった万治元年(1658)との間に61年の時の流れがある。その間にもう一代入れた方が自然であり、入れることによって伊藤政武が五代目となって、後に記すように話があるのである。また筆者はこの三代目樹栄定輪が三之丞という名であり、従って武陽染井野人、三之丞の名の入った『花壇地錦抄』の著者は、樹栄定輪と考える。それで石井氏その他の人々の三代目覚栄道実の著と思われない。なぜなら石井氏の表にもあるように、無量寺過去帳にも染井三之丞内とする妙雲信女は、元禄4年(1691)12月18日に亡くなっている。三之丞の妻は覚栄道実の妻とするより、樹栄定輪の妻とする方が自然である。

伊兵衛の住居の前は、道をへだてて藤堂和泉守の屋敷であった。

「躰つづじ園いへいや猪兵衛として江北の木商なり。其初めは藤堂大学頭高久の露除なりの男成しに、大学頭、草花の類当座に移し持たせ、花過ぬれば悉くぬき捨てさせけるを、此伊兵衛うき植ためけるより、次第次第にきり島つつじ、百椿、杜芍、さらぬ花の木、百竹、百楓、百桜などと好けばあつまる所なるべし」(東都紀行 1719 記<sup>9)</sup>)とあるから、伊藤伊兵衛が門前の藤堂高久邸の庭の手入をし、高久公が捨てさせた植木を自分の畑に移して、つつじ栽培を盛んにし、つつじや猪兵衛とよばれたことがわかる。藤堂高久(1638-1702)は織田、豊臣、徳川の三将につかえた猛将、藤堂高虎の孫にあたる。高久公の庭師をつとめたのは三代目樹栄定輪とする方が、二代目とか四代目の覚栄道実とかするより年代からみてよいと思う。このことから、畑に草花を植えて楽しんだのは二代目からだろうが、本格的に植木屋、園芸家となったのは三代目樹栄定輪からであろうと思う。

『錦繡枕』序には人名がないが、著者そのものの序であることは文でわかる。五巻の巻末には 元禄五年申初冬 / 作者自画 江戸染井きり嶋屋伊兵衛 として霧島という

判があり、書林松會三四郎開板とある。これは享保 18 年（1733）刊行の書名では『長生花林抄』となり、内容は同じである。序文のなかに長生花林抄とよんだらよいといわれた記事がある。『花壇地錦抄』のツツジの類のところに「つつじるひハ長生花林抄といふ五冊の双紙に花形を図にあらはしくわしくしるし前にひろむゆへ爰にハ略してわずかにその事を記す」と書かれているから、元禄 8 年（1695）すでに長生花林抄が通り名だったことがわかる。

西福寺の隣りに染井稲荷神社があるが、その石仏の背面には 染井村稲荷大明神御本地の文字をきざみ、蓮座の部分には 延宝二年二月吉日 伊藤猪兵衛同松女 造立者西福寺祐心 とあることは前島氏もいわれている<sup>9)</sup>。祐心は西福寺三代目住職で延宝 4 年（1672）になくなっている。前島氏は「同社はこの三代目伊兵衛（三之丞）の建立に成ったともいわれている」と記されたが、日付から考えると、寄進者は伊藤伊兵衛二代目と考える方が妥当と思う。

### （3）五代目伊兵衛 樹仙浄観、政武

五代目伊兵衛、政武は伊藤家で園芸家としてもっとも花々しく活躍した人物である。『増補地錦抄』は巻末に東武江北染井/作者自画 伊兵衛/宝永七年寅初春とある。『広益地錦抄』の巻末にも東武江北染井/撰者自図伊兵衛/享保四年亥仲春とある。ともに政武の名は見えないが政武であろう。『地錦抄附録』第三巻の後に東武江北染井/撰者自図 伊藤伊兵衛/享保十八年丑仲春とあり、伊兵衛の下に政武という判がある。第四巻の後は筆者の見た本では奥附がないが、この第四巻は楓の類歌仙追加の二十八種、葉形之図色付ケとある。後に『歌仙百色紅葉集』として売られているがその巻末には東武江北染井/花木草花肆 伊藤伊兵衛/百楓集者 楓葉軒 隠居樹久/元文丁巳時雨紅葉良日とあり政武の判がある。

享保二十年（1735）に出た『續江戸砂子』には当代の伊兵衛は元祖より五代目に当るという<sup>5)10)</sup>。矢野博士は「但し五代と言ふは政武のことではなく恐らく政武は隠居して居たのではないか」と記すが代をずらすならば五代目政武は当然となる。

「伊兵衛政武が時享保十二年三月二十一日有徳院殿経過せられる。松平能登守、松下専助等従ひ奉る 巳刻將軍東門より成らせられ花壇植溜を御覧ぜられ、午刻西門より還御なり」（武蔵風土記稿）<sup>5)</sup>とある。この享保 12 年（1727）は四代目伊兵衛も生存中ではあるがおそらく隠居しており五代目伊兵衛政武が活躍しているさまがよくわかる。そして献上物などに対して翌二十二日政武に銀三枚を賜った。また「命を蒙りて四月二十五日御台所口に参りければ、松下専助命を含んで舶来の樹を示し、この樹他にもまたあるところ亦有またあるところ所ありやと問はれける。未見の由申しければ、近似たるものはなきやとありし時、俗に深山楓と称するもの近しと申しければ、折枝を呈せよとの事にて一朶を獻じたり。同二十九日又命ありて一本を召され、又実の形状をも書いて奉るべしとなり。五月二日一本の深山楓を盆に移し、別に実の附きたる折枝を添て吹上の御庭に至て獻



ず。其年九年二十二日、松下専助が宅にて内命を伝へ、曩に奉し深山楓に舶来の楓樹を接木せられて下し賜ひ、此樹珍奇なり、生育して種を世上に広めよと命ぜらる。此樹今廻り一丈二尺余の大木となる」(同上)<sup>5)</sup>

この舶来の楓樹は『増補地錦抄』第四卷または『歌仙百色紅葉集』の巻頭にあって唐楓として「就御用(ごようにつぎ)、唐船長崎之持渡り作、唐楓之筋」として図もある。これがトウカエデ *Acer Buergerianum* の我が国に普及するはじめと考えられ興味が深い。ミヤマカエデ(深山楓)は現在いうハナノキ *Acer rubrum* var. *pycnanthum* であろう。なお染井の伊藤家諸家の花壇には翌年も吉宗と世子が、宝暦四年には將軍家重がお成りになった。

伊兵衛政武の園内のありさまは『武江染井翻紅軒霧寫三図』<sup>1)</sup>でその立派なありさまがよくわかる。軒主江戸染井伊藤伊兵衛の下に政武の判があり、近藤助五郎清春が画いたものである。伊兵衛はまた江戸城吹上で育ったサクラの苗木を飛鳥山に、モモやサクラを墨田川堤に植えた(有徳院殿御実記)。これらは後の桜の名勝地となり、上野の桜より人気が出た。「享保の比までは、花見は上野にきわまり、外に名所またあらしと人々おもしろしに、元文の始め、飛鳥山にけをされ、いまの上野へ行人へ、紙子ばをりのふる入道(古入道)、かねもたぬはやらぬ医師か、世をしのぶふかあみ笠のふじやの伊左衛門から釣をとるやうなわる(やつ)のミ」。(銀杏栄常盤八景)ということに一



右はトウカエデ左はミヤマカエデ『増補地錦抄』第4巻または『歌仙百色紅葉集』のなかの頁から

時はなった。

ソメイヨシノが染井から出たサクラであることは有名だが何時の頃か、おそらく五代目伊兵衛よりはだいぶ後のことであろう。

政武の著で石井氏のあげる『草花名寄略書』は矢野博士<sup>5)</sup>の『草花名寄?』であろう。矢野博士蔵書は最初の一部を欠き、題はわからないが終りに「是は草花名寄略書也。花木のるい、草花の品々花葉絵入并植分の時分やしなひ植作りやうは増補地錦抄広益地錦抄十六冊にくわしく記出す。享保七年初秋良日、江戸染井伊兵衛とあるから「仮に草花名寄と記して置いた」<sup>6)</sup>という。それで石井氏も『草花名寄略書』とされたが、本来の名は『四季草花名集』(1722)である。春夏秋冬にわけて季節ごとにみられる草花の名をあげたもので、最初の「正月より三月之花咲るい」の始めにはフクジュソウがくる。

『百花椿名よせ色附』と石井氏の表にあるのは矢野博士の『百種椿銘寄せ』(写本)と同様のものだろうか。石井氏旧蔵の写本が津山尚氏の『日本の椿』<sup>2)</sup>の巻末にそのまま写真複製となっている。色附はそれでみると色付となっている。旧田中芳男本『百花椿名よせ色付』は判行されているものだが、刊行の年はわからない。最後に右百件椿花形名寄/江戸染井伊藤伊兵衛とある。色付とは様子の解説付という意味で第一番(太郎冠者)から第百番(小町)まで名と簡単な記述がある。石井氏旧蔵本はこの刊本の写本と思われる。石井旧蔵の写本では七十番をぬかして写してしまい百番の次にそれを書いている。また津山氏の『日本の椿』にもう一つ国会図書館白井文庫のつばき名よせ帖はこの「百花椿名よせ色付」刊本に至る原稿ではないかと思う。それには「文化九年壬申二月中旬写すとある」。文化9年(1812)なので刊本が出たのはこれより後の出版と思うから、これは七代目あたりの伊藤伊兵衛の仕事であろう。

#### (4) 草花絵前集の著者

『草花絵前集』の著者は誰であろうか、これは今まで問題なく石井勇義氏の表と同じように伊兵衛政武のものとしてされてきた<sup>5)6)</sup>。しかしこれは疑問の点が多々ある。第一に政武とすると数多い政武の著書で一番初めのものとなる。矢野博士<sup>6)</sup>によると「政武は年八十二であったとは室田老樹翁の話ださうであるが其は何から出た事であるか、白井光太郎博士の本草百家伝(稿本未刊)にも年八十二とあるが出所が記していない。只此の説を正しいものとして考へると、彼は十七歳から著書があった事になる。十七歳位で著書があっても不思議はない。父祖代々の樹芸家であってみれば、其教を受けて書いたものと考えられない事もないが、私には疑問が残る」と記されている<sup>7)</sup>。十七歳で著書があってもよいが、次の著書よりも図の性格が違うのはおかしい。晩年の作ならばこのような図となるがそれでは年代があわない。

第二に序文には「元禄己卯小春の日武陽染井之野夫」とあり、最後に追白として「草花絵後集ニ此外草花品々を板行者也 草花植作り様やしなひ仕様は地錦抄といふ草

紙にしるして前に出さゆへ是ニ不書<sup>カズ</sup> / 元禄十二卯十月吉日耕人伊兵衛図」とある。もし若いときの作なら他の書を多数出しているのに前集のみで後集を出さないのはなぜか、疑問が残る。また政武は他の本では東武江北染井と書くのにここでは武陽染井となっている。武陽染井の野夫といういい方は三代目の『花壇地錦抄』の武陽染井野人の三之丞といういい方に似ている。

第三にそれでは三代目の画かというところともいえない。序文にはこれは父が画いた図であるという。画家の筆でないから書き方は心得てないが、実物をそのまま写生したので、花や実を知り植える人の参考になるので「花の咲比色品<sup>サグコソビキシン</sup>を註し桜に彫て世に廣<sup>オオクニ</sup>なすと言<sup>ヲイフ</sup>」というのだから、父の絵を編集して註をほどこして出版したとみるべきである。

これで三代目伊兵衛三之丞が第二代目伊兵衛の図を出版したととれるし、四代目伊兵衛の覚栄道実が三代目伊兵衛樹栄定輪の絵を出版したものとされるが、三代目が生きている時なので、三代目が二代目（戒明不明）の図を出版したとみる方が自然である。想像をたくましくすれば、三代目樹栄定輪が、亡くなった父の描いた図集を晩年に出版したのではなかろうか。そして図はまだあって後集を出すつもりでいたが、三代目自身も10年ばかりたって亡くなり、後集は出せなかった。

前島氏や東京都教育委員会の記す『草花絵全集』とあるのは、後集がでてそれを合せたものでなく、『草花絵前集』の後刷りで、後集が出ないことがはっきりして、題名を変えたものである。内容は全く同じだが『草花絵全書』として売り出されたことがあるのも事実である。享保18年版の「長生花林抄」の終りの広告に、草花絵全書 全三冊 絵を習ふ便として百花百草悉もれず、とする。教育委員会の立て札にある『草花絵百図』も同じものと思う。『草花絵前集』が、上巻に34頁、中巻に40頁、下巻に39頁にわたり図があるから、全部で114頁の植物図があり、大体百図であるから名づけたのであろう。ただ1頁に2植物をかく8頁があるから、正確には全部で122の植物数を扱っている。

#### (5) 六代目以下の伊兵衛

六代目 春山證覚の墓は、政武すなわち五代目樹仙浄観の墓の向って右側にあり、春山證覚信士と春悟妙鏡信女と字が並び中央下に霊位とあるから、これは夫妻の墓だろう。横に弘化二乙巳正月十八日 施主伊藤伊兵衛とあるから、七代目が1845年にたてたものである。無量寺の過去帳によると、春山證覚信士は享和元年辛酉正月二日染井伊兵衛トとあり、春悟妙鏡信女は染井伊兵衛母八十七才死とある。主人が享和元年(1801)に亡くなっているから、六十才近くで主人を亡くしたのであろう。

七代目は石井氏の表の順序でいくと等空清信士となる。しかし無量寺過去帳には、嘉永元申染井、等空清信士、伊兵衛梓とあって、伊藤伊兵衛というようにはなっていない。それであるいは伊藤伊兵衛をついでいないのではないかと思う。

無量寺の過去帳によると、嘉永六癸丑年十一月三日後繁寿榮信士と、安政二乙丑歳寂願清入信士が共に伊藤伊兵衛とあるから、この二人をそれぞれ第七代伊兵衛(1853 歿)、第八代伊兵衛(1855 歿)と考える。あとは無量寺の過去帳ではわからないが、伊藤伊兵衛政武の墓に向って一番左端の墓の真中に芳安全明信士とあり、墓石側面に九代目伊兵衛娘加祢と建てた人の名があるから、芳安全明信士を九代目伊兵衛と一応考えておく。芳安全明信士の右側の字、梅全智鏡信女 明治九(十九?)年一月三日左側の字は 直(?)鏡妙照信女 明治十六年七月廿四日とあり、墓石の側面に非常に読みにくい、十一代目大門口清水安(?)太郎とよめる。ところが西福寺の過去帳に、明治十年一月十四日梅全智法信士として、施主が大塚坂町清水金太郎とある。これは墓石にある十一代清水安(?)太郎と同一人ではなからうか。そして梅全智鏡信女は過去帳では明治十九年一月三日とあり、施主は後藤氏である。結論として、梅全智法信士が十代目伊兵衛で、十一代目は清水姓となったのではなからうか。

故花園有運師の話では、伊藤家は十代目までは植木屋をしていたが、十一代目から植木屋をやめたという<sup>1)</sup>。とすると十一代目から清水姓となったことと話があう。また小林氏によると、最後の伊兵衛は明治に入って人力車夫をしていたが、路上に凍死したとのことである<sup>1)</sup>。

#### (6) その他の伊藤伊兵衛の著書

江戸染井伊兵衛と記す簡単な印刷物に『さつき名集』『躑躅名寄集』『草花種蒔やう』を見たが、何代目伊兵衛のものであろうか。『さつき名集』には 167 品種を記し、『躑躅名寄集』はつつじ 206 品種を記すのみであるが、品種が多くなっているから、政武晩年のものか、それより後のものであろう。

矢野博士<sup>9)</sup>は『花壇大全』宝暦版四冊をあげて「私はこの本を知らない」と記す。岡不崩氏<sup>11)</sup>は白井藏本の『花壇地錦抄』八冊 京都版を紹介されている。それによると元禄八年に京都書坊華文軒 中西卯兵衛藏版として出されたものがあり、江戸版と様子を異にしている。巻末には後集として、花壇地錦抄全部八冊と書き「右地錦抄にもれたる草木類悉く記して追て開板仕候御求め御覧可被下候」とあって、花壇地錦抄前集 6 冊 / 京都書坊華文軒 / 中西卯兵衛藏版となっている。筆者はこれがいわゆる『花壇大全』となったと思う。

『増補花壇大全』四冊は作者洛東住、華文軒風土撰として、宝暦七年八月吉辰、建仁寺町四条下ル二丁目、中西卯兵衛がでた。京都版の『花壇地錦抄』とこの『増補花壇大全』を合一したものと思われる。『増補花壇大全』八冊は文化 10 年(1813)刊である。しかし序文は于時元禄七歳仲冬日とあって、元禄七年(1757)で華文軒主人とある。第一巻と第二巻は上下二冊にわかれるので、六巻八冊本なのだが、増補は一巻の下と二巻の上、三巻の前半、四～六巻らしい。第四巻の終りに文化十年癸酉増補とか、第六巻の終りに花壇地錦抄巻六終大尾とか、第六巻の刊記に三之丞集などあって、要す

るにつぎはぎしたものである。序文を書いた華文軒主人の作と一般にみられるが、この人は天文暦算にも通じた人で、中西または加賀屋華文軒である。

(7) 『地錦抄』について

一般に『地錦抄』というとき二つを区別して考えねばならない。一つは三代目伊兵衛の三之蒸の『花壇地錦抄』のことである。もう一つは五代目伊兵衛政武の『増補地錦抄』8冊、『広益地錦抄』8冊、『地錦抄附録』4冊を一括しているものである。これらはすべて同じ大きさの小本である。後者は一つの箱に入れられて保存されていることが多い。箱に入れて売ったこともあるのではなからうか。『増補地錦抄』は『花壇地錦抄』を包含し、さらに記事と図を増補したものである。『花壇地錦抄』はもともと図はない。『増補地錦抄』を持つ人は『花壇地錦抄』はいらないのである。

地錦抄は筆者も長くちきんしょうとよんできた。多くの本でもそのようによんでいる。しかし『草花絵前集』には地錦抄にちきんしょうと仮名がふってある。注意してみると『図書総目録』ではじきんしょうという読み方だった。

一連の『地錦抄』ははじめ花木花草にはじまり、次に「広益」というように薬用や有用のものを扱い、「附録」では一般にみられる野草にも及んだ。それで『地錦抄』20冊は、範囲はせまくとも図入り日本植物誌とみとめられる。この研究で筆者は中川淳庵がチュンペリーにこれを贈呈した意味が、よりよく理解できるようになり、伊藤伊兵衛を一そう評価する気もちになったことは事実である。この機縁を与えられた石井氏遺族はじめ、津山博士に感謝すると共に、研究を援助された西福寺、無量寺の両住職、前島氏論文を見せて下さった深津正氏に御礼を申し上げる。

(追記) 本稿を印刷所に渡す直前に、石井勇義編『園芸大辞典』第一巻、誠文堂新光社1944の伊藤伊兵衛の項(161頁)を石井氏自身が書かれていることに気付いた。これは学会発表の後のことと思われ、伊兵衛歴代の戒名も紹介されているが、死亡月日は略されている。そして表のすべての著書を「同一人の著であるという感が深い。又生存年代から同一人の著と見ても不思議はないが断定は今後の研究に譲る」と結論されている。

## 引用文献

- 1) 津山 尚, 椿の話. 津山 尚・二口善雄 日本椿集 419-460 平凡社 1966.
- 2) 津山尚編著 日本の椿 2巻 広川書店 1969.
- 3) 木村陽二郎, Thunberg の参照した日本本草書. 科学史研究 9 No. 94 1974.
- 4) —, 日本自然誌の成立—蘭学と本草学 中央公論社 1974.
- 5) 矢野宗幹, 染井の種樹家伊藤伊兵衛. 実際園芸 17 No. 4: 257-262 1934.
- 6) —, 徳川期園芸の先進伊藤伊兵衛のこと. 盆栽 23 No. 10: 29-30 1943.
- 7) 小林憲雄, 地錦抄著者伊藤伊兵衛の墓を発見す. 盆栽 7 No. 4: 9-12 1927.
- 8) —, 地錦抄とその著者について. 盆栽 23-10: 31-33 1943.

9) 前島康彦, 江戸樹芸の大成者伊藤伊兵衛のこと。植物春秋 8 No. 1-4, 6 1963 (なお氏に同名で同じような内容の論文が昭和三十四年度街の植樹祭 首都緑化推進委員会 1959 にのっているという)。10) 香山益彦, 花壇地錦抄(複製と解説) 京都園芸倶楽部 1933。11) 岡 不崩, 古版本草書解題 草本之部。盆栽 8 No. 6: 10-15 1928。12) 上野益三, 日本博物学史。平凡社 1973。

### Résumé

The most famous horticulturist of Japan in Tokugawa period was Ihei Itō. However, this is not the name of one person, but the name of the Itō family. At the Horticultural Society of Japan Yūgi Ishii read a paper on Ihei Itō's family and their books, but he did not leave any record except the three tables used at this occasion. These tables explain the successive generations of Ihei Itō, their posthumous Buddhist names and their dates of death. The tables assigned the authors of many horticultural books to some of them. At this opportunity of the publication of Ishii's tables I would give them some reconsiderations, based on death registers of Saifukuji Temple and Muryōji Temple, the epitaphs in the temple cemetery and Ihei's published book styles. My conclusions are as follows. The author of Kinsyū Makura (Pleasure of Earth's Raiment 1692) and Kadan Jikinsyō (Earth's Raiment for Garden 1694) was Ihei III (Juei Jōrin, Sannojo, ?-1719). The author of the series of Jikinsyō (Earth's Raiment 1710, 1717, 1733) was Ihei V (Jusen Jōkan, Masatake, ?-1757). Kusabana E Zensyū (Pictures of Flowering Plants I) was published by Ihei III, based on the pictures drawn by Ihei II, whose posthumous Buddhist name and date of death are unknown.

□G. G. Simpson 著 白上謙一訳: 動物分類学の基礎 ix+272 pp. 1974年 岩波書店 3000 円。本書は 1961 年に出版された名著 “Principles of animal taxonomy” の翻訳である。進化機構論として広い範囲の生物学者に支持されている総合説をいちはやく古生物学に適用した著者が、Dobzhansky (1937) らの遺伝学, J. Huxley (1940) らの New systematics, Mayr (1942) の生殖的隔離による種の定義をふまえて分類学の諸原理を考究したもので、これを凌駕する分類学の理論書はいまのところないとさえ言われている。ここに取上げられた “特定の生物のグループやその分類は、原理を帰納的に推論するための根拠” となる例としてのみ扱われている。したがって本書で扱う分類学の原理は大部分植物にも適用できると著者も断っている。重要な用語のものの語を明記しているのは本書の性格上適切な処置であったと思う。(大場秀章)